

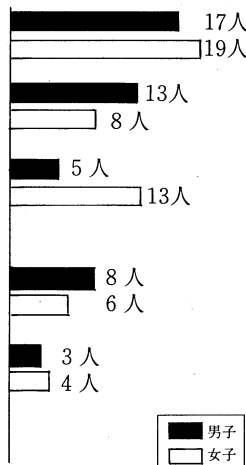
資料7 相互評価、パフォーマンステスト実施後の生徒の反応

1. 学力向上に役立ったか (+ : 役立つ
0 :
- : 役立たない)

| | 男子 | | | 女子 | | |
|-----|----|----|----|----|----|----|
| | - | 0 | + | - | 0 | + |
| 1 組 | 2 | 12 | 7 | 2 | 15 | 5 |
| 2 組 | 3 | 13 | 7 | 3 | 9 | 10 |
| 3 組 | 1 | 13 | 8 | 0 | 14 | 9 |
| 4 組 | 3 | 8 | 11 | 0 | 15 | 8 |
| 全体数 | 9 | 46 | 33 | 5 | 53 | 32 |

2. 実践後の生徒の反応 (㊸: 相互評価 ㊹: パフォーマンステスト)

- ㊸ 実験器具の基礎的な操作法がわかるようになった (36人)
- ㊸ 自分の力で実験するとおぼえやすい。(21人)
- ㊸ 実験にあまり真剣にとりこまなかった人も参加するなど、ひとりひとりが授業に参加するようになった。(18人)
- ㊸ ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊸ ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- ㊸ グループ全体で実験すると、理解したかどうか分からないが、一人一人やると、できるかどうか、はっきりわかる。



(四) 授業の組織 (二)で述べたように、確認テスト、相互評価、自己診断表、パフォーマンステストを学習をすすめる過程に組織したことは、意欲の向上につながり、学力を向上させるのに有効であった。また、単元

の目標分析、指導計画、評価計画等も生徒の到達状況を評価するのに欠かせないものであった。今後もこの一連の作業をすべての単元に実施してみたい。

(17)の到達率 (女子54.7%)
このように、相互評価をとり入れた授業での到達状況は、かなり高い値を示している。
① パフォーマンステストを実施したことにより
生徒の反応と変容(資料7)
調査資料によると、このテストを支持する感想が多くあり、生徒が観察実験の技能を高めることができたことがわかる。そのため、自信が付き意欲的に活動できるようになることもわかった。パフォーマンステストを実施する時、はじめの合格者のうち何人かを検定員として、観点をチェックさせたが、このような学習

活動は、自然に対する関心・態度を育てることになるのではないかと思う。
② パフォーマンステストによる生徒の到達度の変容
生徒全体をみると、電流の大きさを測定できる生徒、電圧を測定できる生徒とともに、二回のテストを比較してみると、到達度が高まり、かなり、技能の向上に役立っていることがわかった。
男女一名ずつ抽出すると、生徒番号6と31の生徒は、はじめは、電流や電圧の測定すらできなかったが、最後のテストでは、電流、電圧の測定ができるようになったばかりか、そのデータの処理や解釈もできるよ

うになったなど、個人の技能が高まっていることがわかった。
(4) 自己診断表による自己評価を継続的に実施したことにより
学習内容ごとに、自己評価を継続的に実施していくと、生徒一人一人の情意面の変化、認知面の到達度を知ることができ、教師にとって、指導法の反省、改善に役立った。
また、各学習内容ごとの各観点的自己評価の結果、0や十の生徒が多く、単元全体をとおして、意欲的な活動を高かったことなどがわかった。
(三) 生徒一人一人の実態の把握
単元の目標を分析し、行動目標を設定し、それを評価するために、評価の方法を工夫し、生徒一人一人の到達度をチェックしてきたことは、根気のある作業であったが、個別指導に役立ったり、観点的評価には有効であり、生徒の変容を把握することができた。

七 反省と今後の課題
授業の導入の段階において、教師が学習課題の提示を行った時、それに対して生徒がどのように興味、関心を示したか、また学習目標を一人一人の生徒が自らの課題として主体的、積極的にとらえたか、なども評価の対象として取り上げなければならぬと思った。
次に、観点的到達状況を評価する上で、最も考えさせられたのは、自然に対する関心、態度的情意的領域の評価である。今回は、自己診断表や観察法、レポートによるところが中心であったが、認知的領域との関連も考えた評価の方法をもっと工夫し、評価しなければならぬと考えている。